

# 情報システム工学演習 II 画像処理 レポートテンプレート

08D12345 大倉 史生

20xx 年 x 月 x 日

これは、情報システム工学演習 II 画像処理演習のレポートテンプレートである。

- 本レポートの作成には  $\text{IAT}_{\text{E}}\text{X}$  を使うことを強く推奨する。
- ページ数は 1~2 ページ程度を目安とする（が、それより長くても良い）。日本語か英語で記述すること。
- 実装したアプリの内容をうまくアピールするように、本レポートのタイトルを適切に変更すること。
- かきあげたレポートをコンパイルし、{ 学籍番号 }.pdf のファイル名で提出すること。その際、この辺のインストラクション用の文章は削除すること。

本演習は、アプリの「独創性」および「完成度」、レポート記述の「充実度」で評価する。下記に章立ての一例を示すが、この内容・順番にこだわる必要はない。

## 1 背景

皆さんの生活にどのような問題があり、この演習で作ったシステム、ツール、アプリがどのように役に立つか説明すること。

あなた自身、あるいは特定のターゲットとなるユーザーにとっての実用性がきちんと説明されていれば十分である。一般的な観点では実用的でなくとも、あなた自身（あるいは特定のユーザー）が有用であると思えることがレポートの記述からわかれば、それで良い。例えば、「暇つぶし」や「なんとなく楽しい」などもすごく立派な用途である。これらがとなり得るシナリオをレポート中にしっかり記載すること。

## 2 実装したツール

本演習で実装したツールの概要を以下に示す。

### 2.1 外部仕様

ユーザーはどのようにそのツールを使うのか記述する。どんな画像を用意して、何を起動する、どのボタンを押す、そうすると何が得られる、など。

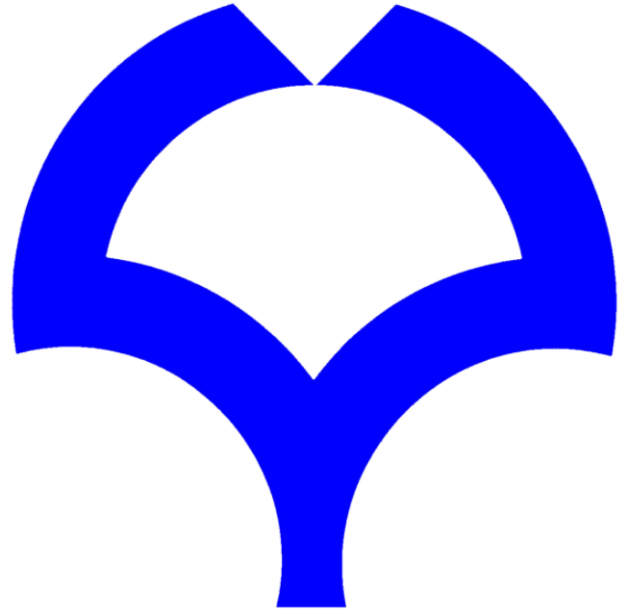


図 1 図の例

### 2.2 内部仕様

そのツールは、どのような仕様で実装されたか説明する。処理のフローなどを示すのも有用。参考にした資料がある場合は引用すること（Canny エッジ抽出器の例 [1]）。

### 2.3 使用した関数やライブラリ・実行環境

デフォルト以外のライブラリを使った場合、また、特殊な環境で実行することを前提とする場合は記載すること。

## 3 実行例

実行例を記載すること。実際の入出力画像を貼り付けるのも有用であるが、どのような結果が得られるのかを文章でも説明することが重要。図 1 に図の例を示す。

## 4 考察・感想

考察や感想

## 参考文献

- [1] John Canny. A computational approach to edge detection. *IEEE Transactions on Pattern Analy-*

*sis and Machine Intelligence*, No. 6, pp. 679–698,  
1986.